

「三菱商事アート・ゲート・プログラム2021-2022 支援アーティスト6組による新作展」のカタログに収録されているメンターによるテキスト

正常と異常、その境界が綻ぶ瞬間

榊田倫広(東京国立近代美術館主任研究員)

小山渉の作品を見て、わたしは少し前に帰省し、久方ぶりに会った近所の人との会話を思い出した。「小さい頃は天才だと思っていたのに、学校に行くとそんなことなかったのよ」と、その人は、地元の工務店に勤める息子について語った。そのときわたしはうまく考えが整理できずに口をつぐんでしまった。天才はどうして凡才になってしまうのか。あるいは、いつの間にか凡才として振る舞うことに馴れさせられてしまうのか。問題は当人ではなくて、学校という社会の枠組みにあるのではないか。今振り返ってみると、未就学の小さなわたしにとって、一回りほど年の離れたその人はすでに学校に通っていたが、何でも知っている頼れる近所のお兄さんだった。つまり少なくともわたしにとって、彼はなお天才だった。あとき、そういうふうには言えればよかった。もっとも、何の慰めにもならなかっただろうし、彼女にとっても大して深い意図のない身内への軽口に過ぎなかっただろうけれど。

小山の新作は、映像作品として撮るという建前において、精神疾患を抱えつつ看護師として働いている方が日頃、やってみたいと思っているができないことを実現させてあげるべく、被写体と作者が協働するというものだ。主に4つの場面に分かれている。被写体が日頃いかに抑圧されているかを語りながら、白い壁に泥を投げつけ自らも泥まみれになる。顔を燃やすシミュレーションをするために顔を赤と黒で塗り、顔が燃えているという感覚を作り出すために、顔に手を当てて温めてみたり、作者にドライヤーを当ててもらったりする。被写体の刺されたいという願望を満たすために、アパートの踊り場で作者が被写体に突き刺すと引っ込むおもちゃのナイフを何度も突き刺す。そして病院で寝台に拘束された辛い経験から優しい梱包方法を考えたいという被写体の試みに付き合い、最終的には梱包された状態の被写体を作者が車で運び出す。

二人の関係は互恵的だ。作者は社会の枠組みを壊したいという被写体の欲望の昇華のお手伝いをする。一方で被写体曰く「社会の枠組みのなかでお遊びをしている」アーティストである作者の作品制作に、被写体は付き合っている。一見すれば、被写体の社会規範から逸脱した欲望に関する言動や行動が異常なものに映るかもしれない。しかし映像のなかで正常と異常との境界はふとした瞬間に決壊する。その実、綻びは至るところにあるはずだが、わたしにとってもっとも印象的な綻びの徴候は、それまで主に声や後ろ姿のみで登場していた作者である小山が不意にカメラのフレーム内に闖入したときである。友好的であることを示すとともに、同時におそらくは相手の反応に若干狼狽もしている結果としてのにやけた表情。撮影のための小型カメラをつけたヘッドギアを直接被っており、ヘッドギアのバンドの隙間から頭髮が飛び出している。普段着ながら洞窟探検でもしているかのような出で立ちで「作品」を作ろうとしているその姿は、なかなか異形だ。

カメラの外にいる存在が不意にその枠内に映り込んでしまうのは、彼のラフな撮影手法による。頭につけたGoProやハンディカメラは作者と被写体の動きに反応し、両者の間に横たわる親密な雰囲気演出するが、一方で作者の内的な動揺も微細に拾い上げてしまう。実はメンタリングのさなか、「小山さんの扱うテーマならば、より構築的に撮影し、編集する手法もあるのではないか」と問いを投げたこともあったのだが、この作品に関しては小山が採った手法は適切だったように思う。

言うまでもなく、常識から外れていることを行なっているからアートなのではない。当たり前のように感じられる諸規範を相対化し、別の可能性を考えさせてくれることが肝要である。新作の表題《CRPPP ―包括的抑圧防止プログラム―》は、映像のなかの人物たちのみならず、鑑賞者にとっても作用するはずだ。